

古代から中世のシルクロードのコイン

平野伸二

中央アジアでは険しい地理的環境のもと、古代から大国の影響を受けながら、オアシス都市を結ぶ東西の交易路、いわゆるシルクロードが存在した（図1）。それに沿って存在する国々や都市では時代ごとに多様なコインが発行され、今日でも各地から多数出土している。ここでは古代から中世のシルクロードのコインについて概観する。

本稿で紹介するシルクロードのコインについては、地政学的な理由から大まかに2つの地域に分離して研究がなされてきた。まず、バクトリア王国やクシャーン朝などアフガニスタンやパキスタン周辺で出土するコインについては、古くから欧米での研究が進み、ゲーブルやミッチナーらの包括的研究は日本でもよく知られている（Göbl 1967, 1984, Mitchiner 1975-6, 1978, 2004）。一方、ウズベキスタンやキルギズスタンなど旧ソ連邦諸国で出土するコインについては、当然のことながら旧ソ連邦で研究が進められてきたため、それらのコインやその情報は西側にはなかなか知られてこなかった（西側ではミッチナーがかつて初期の研究を発表したがごくわずかである；Mitchiner 1973a）。1981年にスミルノヴァがソグディアナの貨幣についてそれまでの発掘や博物館あるいは個人の収蔵品をもとに発表した研究書が、この分野の最初の包括的な研究といえる（Smirnova（Смирнова）1981）。この研究書は現在でもこの分野の基盤となっているが、その後、数々の研究者によってこの分野の研究が進められてきた（例えば、ルトヴィラゼ 2011, Kamyshev（Камышев）2002, Babayarov 2007, Naymark 2011など）。また、この20年ほどで旧ソ連邦出土のコインも西側市場でもしばしば見られるようになり、一般にも知られるようになってきた（平



図1 シルクロード地域図(7世紀頃)

野 2004)。さらに、これらのオリエントコインのデータベース化も民間で進み (Zeno.Ru; <https://www.zeno.ru/>)、比較的容易に最新の知見を知ることができるようになってきた。しかし、発掘や出土情報は現地でないとうからないことも多く、研究の中心は今でも旧ソ連邦諸国である。したがって本稿の内容の多くが二次的な情報のため正確性には限界があることをご留意いただきたい。

1 古代から中世のシルクロードのコインの特徴

シルクロードのコインには、ギリシア、ササン朝、唐などのコインを踏襲した様々なタイプが存在する。それらのコインには、発行者などを同定したり分類したりするいくつかの手がかりがある。まず、コインには支配者や神の肖像、その他様々な図柄がみられ、そのスタイルの違いにより分類される。銘は発行者の特定に最も重要な証拠となるが、それらはギリシア文字、カロシュティ文字、バクトリア文字、アラム文字、パフラビ文字、ソグド文字、漢字などで刻まれている。また、シルクロードのコインではしばしば発行者やその氏族、あるいは発行地などを示す印 (タムガ tamgha) が見られる (図2)。初期のタ



図 2 タムガの例

ムガはインドパルティアのゴンドファルネスなどのコインに見られるが、アレキサンダー大王やバクトリアコインのミントマークやモノグラムなどが起源になっていると想像される。

2 古代から中世のシルクロードのコインの変遷

シルクロードのコインは大国からの影響により時代とともにダイナミックな変遷を遂げていく。ここではコインの導入からイスラムコインへの移行までを大きく3つの時期に分けてその変遷を見ていく（ルトヴェラーゼ 2003参照）。まず第1段階として、紀元前4世紀から紀元3世紀前半頃までは西洋（ギリシア）式の打刻コインが導入され、周辺地域へ拡大した時期である（図3）。アケメネス朝の領土内では中央アジアにも少なからずシグロス銀貨が流入したが、ソグディアナなどでのコインの発行は定かではない。中央アジアでの本格的なコインの導入は、アレキサンダー大王（位 BC336～BC323）の東方遠征以降で、バクトリアのギリシア人国家によってコインが発行されたことに始まる。セレウコス朝（BC312～BC63）やグレコバクトリア王国（BC255頃～BC139）では、ギリシア本土と同等の非常に精巧なコインが発行され、銘もギリシア文字である。それらのコインはソグディアナにまで出土が報告されているが（Naymark 2014）、その後辺境でつくられたコインは職人の技術力の低下、または異民族による模倣貨のため造りは稚拙である。同様にバクトリアでもギリシア勢力の衰退に伴って、インドスキタイなど異民族による支配地域や後継王朝では独自



図3 紀元前4～紀元3世紀頃 ギリシア式コインの広がりと言響

のコインが見られるようになった。

第2の時期は紀元3世紀後半～8世紀頃で、ササン朝ペルシア(224～651)のコインの言響が広がった(図4)。ササン朝は、表には王の肖像、裏にはゾロアスター教の拜火壇を描いた薄いコインを発行した。特に、ペーローズ1世(Peroz I; 位459～484)がエフタルとの戦いに敗れた結果、賠償金として中央アジアに大量のササン朝の銀貨が流入し、国際通貨としての役割を担うようになったことは重要である。ササン朝の銀貨は、実際に中国国内でも一括出土(hoard)が見られる(コイン23-10; Skaff 1998, 津村・山内 2003など)。また、ササン朝の銀貨の言響を受けた薄いコインは各地で発行された。例えば、シャプール2世(Shapur II; 位309～379)のコインをもとにアルハンのコインがつくられ、またバフラム5世(Varhran V; 位421～439)のコインを踏襲したコインがソグディアナで発行された。その他、クシャノササン、インドササン、キダーラ、ネーザク(ネザーク)フン、西突厥などのフン関連民族(Hunnic tribes)やその周辺民族へササン朝コインの言響を受けたコインが広がり(Göbl



0-1 ビザンチン模倣貨

0-2 ビザンチン模倣貨



図4 ササン朝コインの広がりと言響（4世紀～7世紀頃）

1967, Vondrovec 2014, Alram, 2016)、一部では10世紀以降まで影響が残った。

また、4世紀頃から8世紀頃にかけて中央アジアではビザンチンの金貨等の流入が見られ、シルクロードのコインに影響を与えた。まず、それらの模倣貨もつくられた(0-1～2, 20-4)が、ビザンチンコインで見られる王と女王の肖像のデザインは、北トハリスタン(13-8)、西ソグド(16-8)、チャーチ(20-5)、フェルガナ/東ソグド(21-4)などにも踏襲された。さらに、ビザンチンコインの模倣かキリスト教の信仰を示すかは定かではないが、ネストリウス派

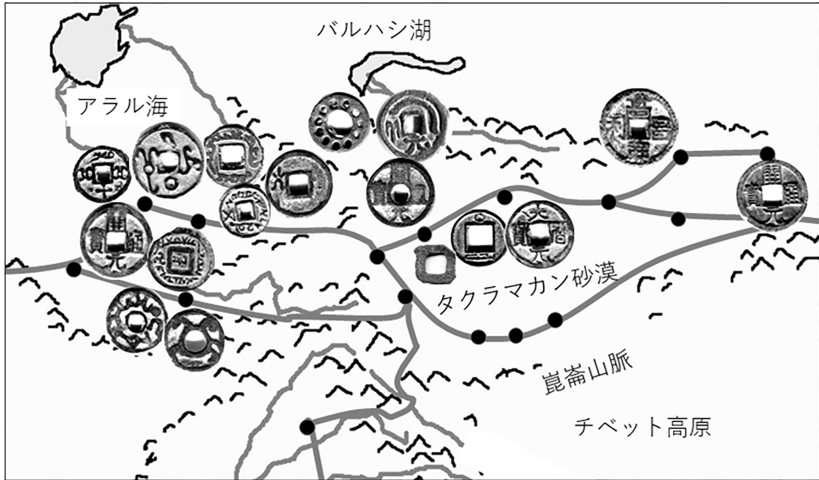


図5 中国の穴銭の広がりや影響（7～9世紀頃）

の十字架は北トハリスタン（13-13）、ホラズム（14-8）、パイケント（16-18, 19）、ウスルーシャナ（19-6）などのコインの一部で見られる。

第3段階は、7世紀頃からアラブの侵攻が始まる8-9世紀頃までで、この時期には中国銭（鑄造による方孔銭などのいわゆる穴銭）の影響が広がった（図5）。中央アジアには7世紀以前にも既に五銖銭などの穴銭が少量ながら流入していたが、唐の開元通寶（621年～）の流入は特に大きな影響を与え、シルクロード各地でも独自の開元通寶が発行された（16-15, 17-13, 20-20, 22-2～4）。さらに、中国銭の影響により各地でソグド文字などを用いた穴銭が発行された。また、時として方孔銭を模したコインも発行された（15-8, 17-23, 20-22, 24-2）。しかし、8世紀頃頃からアラブの侵攻とともにコインにもイスラムの影響が出始め、その後急速にイスラムコインに置きかわっていった。

3 シルクロード諸地域と諸王朝のコイン

ここからシルクロードのコインを地域や王朝ごとに順番に紹介していく。グレコバクトリア王国やクシャン朝などバクトリア周辺のコインについては、体系だっってよく研究されているため、王朝ごとに紹介していく。しかし、それら

は本稿の域を超えるため、ごく一部の代表的なもののみを紹介する。一方、本稿のメインであるソグディアナを中心とした北トハリスタン～セミレチエにかけては、コインの発行者も不明なことも多いため地域ごとに紹介していくが、広大な地域を支配していた西突厥などは、その支配地域ごとに分散して紹介しているので注意されたい。

3-1 アラコシア Arachosia・ガンダーラ Gandhara～ガンジス河中流域 Middle Ganges

最初の西方式（打刻）コインは紀元前7世紀頃にリディアやイオニアなどの小アジアで発行されたが、その後小アジアを支配したアケメネス朝（Achaemenids; 前6世紀中頃～BC330）では、それらを踏襲したダリウス金貨やシグロス銀貨が発行された（1-1）。アケメネス朝がソグディアナなどの中央アジアに達する大帝國となると少なくとも東部のバクトリア付近まではシグロス銀貨などが多少なりとも流入したようであるが、その出土数は少ないためどの程度通貨として用いられたかは定かではない。その後も小アジアでは、イオニアのコインやシグロス銀貨の流れを受けた西方式のコインが発行された。それらの地金は分厚く、表の主たる図柄の刻印（刻印台）に対して、裏はたがねによる打刻のため初期には無紋の凹みになっているが、後期では図柄をもつようになる（Mitchiner 1978, 2004）。

紀元前6～4世紀頃のアケメネス朝のサトラップであるアラコシア付近（カブールも含まれる）では特徴的な地方コインが発行された（1-2, 3）。それらは、小アジアのコインの特徴をもつ一方、異なる特徴も示す。すなわち、凹側の刻印が主たる図柄のように見え、凸の図柄が目立たなくなっている。カブール近郊の Chama-ni-Hazouri などでの一括出土では、これらの地方コインと同時にギリシアコインとガンダーラの打刻印貨幣の一種であるショートバーが含まれている（Curiel & Schlumberger 1953, 1-4, 5; ただし1-5は別の出土）。

仏陀の時代と言われる紀元前6～4世紀頃には、ガンダーラからガンジス河流域を中心としたインドの北部にかけて、打刻印貨幣（Punch-marked coins）が発行された（Gupta 1968, Mitchiner 1973b, 2004, 平野 2003）。それらは地金



1-1 アケメネス朝シグロス銀貨



1-2 アラコシア



1-3 アラコシア
Senior 1997, Mitchiner 2004



1-4 ショートバー
Curiel & Schlumberger 1953, Hirano 1999



1-5 1/2単位 5.5g

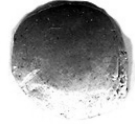


1-6 ガンダーラバントバー 1単位

より小さな刻印が1～5個打刻されているので打刻印貨幣と呼ばれ、古代十六大国とよばれる国々や都市などで発行されたインド最初のコインと言われている(1-4～15)。しかし、古文書などの記録もほとんどなく、コイン自体にも銘がないため、その起源や発行者などについてはマガダ国などの一部を除いて未解明の部分が多い(Rajgor 2001, Mitchiner 1973b, 2004, Bopearachchi & Pieper 1998, Hardaker 2019)。

これらの地域へのコインの導入をまとめると、紀元前6～5世紀頃に西方式のコインがアラコシアに伝わり、さらにそれがガンダーラを経てガンジス中流域に伝わりインドの打刻印貨幣の起源になったという説が有力である

(Mitchiner 1973b, 2004, Bopearachchi & Pieper 1998)。その根拠の1つに



1-7 ベントバー 1/8単位



1-8 カーシー国 Kashi



1-9 カーシー 1/2単位 Hirano 1999-2000



1-10 コーサラ国 Kosala



1-11 パンチャラ Panchala



1-12 マガダ国 Hirano 1999-2000



1-13 マガダ国 Sharma & Hirano 2007



1-14 リッチャビ族? Licchavi?,



1-15 アイヨディア Ayodhya Hirano 2007a, 2009

重量単位の共通性がある。銀の重量単位シグロス (5.5g) は、ガンダーラのベントバーやガンジス中流域の打刻印貨幣の銀の重量単位であるサタマナ (1 Satamana = 11g, 1/2 Satamana = 5.5g) へと受け継がれたと考えられている (なお、インドにはほぼ同時期に海路により伝わったカルシャパナ (Karshapana: 3.4g) という単位も存在する)。また、コインの刻印とその外観も根拠の1つとなっている。実際にアラコシアの打刻印貨幣の中にはインドの打刻印貨幣と同様に複数の刻印をもつものも知られているが、刻印が1個で幾何学模様のはアラコシアとガンジス中流域のコインの類似性が高い (例えば1-3, 5, 7, 9, 15)。

3-2 セレウコス朝 Seleucid、グレコバクトリア王国 Greco-Bactrian Kingdom、インド・ギリク朝 Indo-Greek Dynasty

かつてアケメネス朝の東方のサトラップであった地域では、紀元前327年頃のアレキサンダー大王の東方遠征以降独立し、セレウコス朝 (紀元前312年独立)、グレコバクトリア王国 (紀元前256年独立)、パルティア (紀元前247年独立) などが大量のコインが発行した (Mitchiner 1978)。これらの国々では精巧なギリシア式のコインが発行され、銘に用いられる文字もギリシア文字であ



2-1 セレウコス1世 Seleukos I



2-2 アンチオコス Antiochos I



2-3 ソファイテス ?Sophytes



2-4 ソファイテス



2-5 パルティアアンドラゴラス Andragoras 2-6 バクトリアディオドトス Diodotus I



2-7 デメトリオス1世 Demetrius I

2-8 アンチマコス Antimachus I



2-9 ユークラティデス1世 Eucratides I

2-10 ミリンダ王 Menander I



2-11 アガトクレス王 Agathokles

2-12 アポロドトス Apollodotos

る (2-1~9)。また、銀の重量単位もギリシア式重量 (Attic standard 4.3g) である。その後紀元前2世紀のインドギリク朝のコインでは、裏の銘はカロシュティ文字に置きかわり、銀貨ではインド式重量 (Indian standard 2.4g) が用いられた (2-10~12; Mitchiner 1975-6, 1978)。